Ⅱ．教育論の動向

1．実践教育における正統的周辺参加

岡本　純也

1．はじめに

社会学者ピエール・ブルデューは「スポーツ社会学のための計画表」という短い講演の中で、スポーツ社会学の課題の一つとして、実践教育過程へのアプローチをあげている。

「身体実践の教育が提起する諸問題は、第一級の重要性を持つ理論的疑問の一セットを含み持っているように思われます。というのも、社会科学はその大部分が、意識の手前で産出され、実践的な沈黙の伝達、身体から身体へとも言うべき伝達によって学ばれる、そうした行動についての理論を作り上げようと努力しているからです。そして、スポーツ教育法とは、あるいは、通常政治の領域で立てられる問題、つまり意識化の問題を立てるための、この上ない領域かもしれません。……ある種のことを身体に理解させるには、言葉を経由する必要があるだろうか、言葉で身体に語りかけるとき、果たして理論的・科学的に正しい言葉が最もよく身体に理解させることができるのだろうか、あるいは、時として、伝達したいものの妥当な記述というものと何の関係もない言葉の方が、身体にはより理解されるということがあるのではないだろうか、というのが、提出される疑問の一つです。」

与えられた講演の時間に制限があるためであろう、スポーツ研究者にとっては極めて多くの示唆に富む指摘でありながら、残念ながらここでは課題の内容について充分な説明がなされていない。しかしながら、ブルデューの理論に影響を受けた研究者による近年の議論をみると、彼の指摘した「社会科学」における課題と、それに対してスポーツ研究者が貢献できるであろう点が理解できる。本論においては近年の「実践教育」研究が提出する理論的枠組みを整理し、ブルデューがなぜスポーツに着目するのかについて検討したい。そして、彼とその流れを汲む研究者が提示するスポーツを分析する理論的フレームを明確にしたい。

2．意識下の実践の伝達という問題

ブルデューの実践（プラクシス）理論の中核をなす概念はやはり「ハビトゥス」であろう。人々の行動の原理となるハビトゥスは、「構造化された構造であり、構造化する構造である」と、「構造」という言葉の連なりで説明される。この説明からもブルデューがレヴィ=ストロースの構造主義に直接的に影響を受けたことが理解できるのだが、ハビトゥスは「構造」の概念との連続性とそれを乗り越える性質をもった概念として提出されている。まずは「構造」とハビトゥスの相違点について整理する。

第一に、構造主義のいう「構造」は言語を範型として想定しているように、個人の行動と集団を結びつける概念である。個人の発話行為（パロール）がそれだけでコミュニケーションを成立させるものではなく、当該集団内で発せられた音声記号（シーニュ）と意味の対応の体系（ラング）が共有されていなくてはならない。したがって、個

人の行為は社会に共有された規則に規定される。

構造主義の手法では、民族学者・社会学者は、自分の対象が行った（客観化された）具体的行為を、言語学者が言葉を音声記号として記録するように記述し、その背景にある規則の総体である「構造」を抽出することを目的とする。そして、最終的には「無意識」のレベルの「構造」を明確にしようとするのである[ii]。ブルデューの視点も客観化された行為（食習慣や趣味など）から、当該集団に共有されたハビトゥスという人々の「行動の体系」を抽出しようとする点で、構造主義の流れを汲むといえよう。

では、ブルデューが構造主義を批判的にとらえた点はどこにあるのであろうか。まずは、構造主義について語っている彼の言葉を引用しよう。彼は構造主義と彼の理論の関係について尋ねられ、以下のように答えている。

「その点についても、正直に言うなら、私は一種の理論的感覚の如きものに導かれていたと思います。しかしまた何よりも、構造主義的人類学に伴う倫理的な意味での姿勢に対する、皮膚感覚的拒絶というものにも、おそらく導かれていました。それは、学者とその対象、つまり単なる素人との間に、尊大で距離をおいた関係を打ち立ててしまう姿勢なのです。その根拠となっているのが、アルチュセール派で明示的に現れている、行為者というものを構造の単なる『担い手』(tärger) にしてしまう、実践に関する理論だったわけです（レヴィ=ストロースでは、無意識の概念が同じ機能を果たしています)。レヴィ=ストロースによれば、現地人の行う『合理化』[無意識的行動に対する理由付け]は、実践の真の原因なり真の理由について、人類学者にいかなる解明ももたらすことはあり得ないということになるわけですが、私はこうしたレヴィ=ストロース的言説には従わず、あくまでも情報提供者に、何故という質問を発することにしたのでした[iii]。」

ブルデューはまず、構造主義における研究者と対象の関係に対して異議を表明する。すなわち、研究者の生活する土地とは遠く隔たった場所に住んでいる民族集団に無意識に共有されている「構造」は、研究者が構造分析をすることによって白日の下にさらされるようになり、そのような分析を試みずに無意識のうちにそれを共有する者にとっては到達できないという、知の不均衡を肯定するような学問的態度についてブルデューは批判するのである。このような「研究者＝観察者」「研究対象＝観察される者」という権威的な関係をうち破り、構造主義的な枠組みを研究者自らが生活する社会の中へ持ち込み、研究者自らをも研究対象として捉えるような方法と理論的枠組みを提示したのである。

そして、「構造」を「無意識」に共有されると設定した場合、行為者はそれを自らの意志と関係なく受け入れるのみの存在としか考えられないのに対して、ブルデューは、ハビトゥスを「身体的な性向・慣習的行動」と設定することによって行為者の主体性を確保するのである。ただし、行為者はハビトゥスからまったく自律した存在ではなく、所属する階級や社会集団がもつハビトゥスをまずは継承するものとして想定されている。ブルデューは、アプリオリな「無意識」ではなく「身体性」を構造の受け皿として介在させることにより、無意識的行為→意識化、意識的行為→無意識化の往還が行われる中に、行為者の主体性が関与する余地を残したといえよう。われわれは、既に身につけ意識せずに行えるようになっている慣習行動にも、かつては意識的に行われていた時があったことを知っている。また、一旦身につけた慣習行動であっても、人に指摘されたり自ら努力したりして意識化することにより、苦労はするものの変更する可能性があることも知っている。身体的慣習としてのハビトゥスは、以上のように「無意識」の桎梏から行為者の主体性を解放したといえる。

しかしながら、それではハビトゥスはどのようにして身につけられ、また人々の間で伝達され、共有されるのであろうか。この問題の解明を希求する視点こそ、冒頭に引用した、ブルデューの発

言のカギとなっていると考えられる。彼は「社会科学はその大部分が、意識の手前で産出され、実践的な沈黙の伝達、身体から身体へともいうべき伝達によって学ばれる、そうした行動についての理論を作り上げようと努力している」と述べる。これは、「スポーツの教育」について発言しているように一見みえるが、実は、社会科学上の、いや、ブルデュー自身の課題を通してスポーツを捉えた場合、スポーツの教育の過程にこそその課題を解明するキーが隠されていると指摘しているとも読みとれる。だが、ブルデューの著作を読む限り、スポーツ教育の過程に対して、彼自身が分析を行っているものは見あたらない。つまり、彼は講演の中で、スポーツ研究者に対して、「社会科学上の理論的疑問」の解明を課題として投げかけているのである。

3．実践の共同体における学習

ブルデューの理論に影響を受けたレイヴとウェンガーらは、実践の教育過程の分析に一セットの理論的フレームを展開させた。それが「正統的周辺参加 Legitimate Peripheral Participation」(以下 LPP と略) の理論である[iv]。

彼らの理論の大きな特徴は、まず、その学習の捉え方にある。彼らは学習を指導者から学習者へある知識や技能が伝達される過程と捉えるのではなく、学習者が「実践の共同体 (community of practice)」に参加することであると考える[v]。そして新参者が、共同体の文化社会的実践の十全的参加 (full participation) をする者へ移行する過程を学習としてみなすのである[vi]。

このような理論を構築する過程で、最初に彼らは伝統的な「徒弟制」に着目する。リベリアの仕立屋の手工業徒弟制を観察し、「日常の仕立て作業で、ことさら教え込まれたり、試験を受けたり、あるいは機械的な真似ごとに終始するといったことがないまま、どうやって徒弟が、共通の、構造化されたパターンの学習経験に従事できるのか、それでいておどろくほどの少数の例外を除くと、みんな技能に長けた、尊敬される仕立屋の親方になれるのはどういうわけか」といった疑問を、彼らはもったのである[vii]。そして、徒弟制を包含する実践の共同体の中では、物や人が、新参者を十全的参加者へと導くように構造的に配置されていることに気づくのである。

さらに、彼らは伝統的な徒弟制を構成する限定された社会集団に対してこれらの分析の枠組みを用いるばかりではなく、社会的実践一般の理論としてこの視点を敷衍する。確かに、われわれが自然に行えるようになっている社会的実践の多くは、教育的機関の中においてそうされるように、教材が学習の系統性にしたがって用意されていたり、進むべき道筋を示すカリキュラムが組まれていたりするわけではない。また、教師のように懇切丁寧に理解を促す説明を行ってくれる者もいない。にもかかわらず、社会的実践が可能となるのは、徒弟が知らず知らずのうちにみな立派な親方になっていくように、学習する行為者が実践の共同体に参加しているからであると彼らは説明する。

さて、それでは新参者はどのようにして十全的参加者へと実践共同体の中を移動していくのか。ある実践を身につけようとする者にとって、社会の中では一般に学校で教えられるように、順序立ててその内容が提示されるわけではない。新参者の目の前にいきなり広がるのは、十全に実践を営む熟練者の姿である。そうした実践の共同体の入り口に立った新参者は、何も理解できないままそこに佇んでしまうかというとそうではない、と LPP では説明する。新参者は新参者の「見方」で一連の実践や実践の共同体を構造化してとらえるというのである。そして、先行する参加者である「親方」や「兄弟子」の活動を模倣したり、実践活動をシェアーしてもらったりする中で、自身の「見方」を変化させていく。この絶え間ない (実践を構造化する)「見方」の変化と、自ら従事する実践で身につけた行為の構造の変化を繰り返しながら、新参者は実践の共同体内における自己の位置を変化させていくのである。

ブルデューは、ハビトゥスによって生成された実践はハビトゥスによって構造化されて行為者にとらえられると設定する。たとえば、上流階級の者が性向としてクラッシック音楽を好んで聴き、中流階級の人々がポピュラー音楽を好んで聴いている場合、今度はそれぞれのハビトゥスが「クラッシック音楽＝上流階級のもの」、「ポピュラー音楽＝中流階級のもの」と構造化し、自らの階級の属する音楽を志向するようになる（現実はそう単純ではないが）。このようなハビトゥスの二面性によって、ハビトゥスは再生産されていくのである。

LPP 理論の中では、この実践の生成原理としてのハビトゥスと評価図式としてのハビトゥス（両者は裏と表の関係にある）の絶え間ない変化によって、新参者が十全的参加者のハビトゥスを身につけていくと説明するのである。

LPP 理論の枠組みでとらえた場合、先述した、無意識の「構造」を行為者は担わざるを得ないといった構造主義的学習観や、獲得目標としてのハビトゥスが厳然とあり、それを行為者は身につけていくといった学習観を回避することができる。また、教師的存在（「構造」を身につけた者、ハビトゥスを身につけた者といった）から知識や技能が学習者へ一方向的に伝達されるという学習観も避けられる。さらには、そのような先行する構造など全くなく、行為者どうしの相互的やりとりの中でお互いがその場に応じて学習していくといった学習観をも退けることができる。すなわち、先行する実践への参加者の行為・活動は、彼らが身につけた、構造化された「行動図式」によって一定の構造として見る者の目の前に現れる。そして、新参者や後進の参加者は、それらの先行参加者の実践を、自ら身につけている「評価図式」で構造的にとらえる。しかしながら自ら、その時点での実践を試みるが、そこに先行参加者の実践と自らの実践との隔たりをこれもまた構造化して見てしまう。このような繰り返しにより学習（実践へのさらなる参加）が促されるのである。

このように、学習を実践共同体への参加として考えると、この理論が何故「正統的周辺参加」、また「状況に埋め込まれた学習（Situated Learning)」の理論と名付けられたかも分かろう。

学習をする行為者は、その学習に参加することを認められたという意味で「正統的参加者」である。また、参加の度合いが高いレベルに進行した参加者、たとえば「親方」「師匠」「名人」と言われる者であっても、自ら身につけた構造図式でとらえた場合、暫定的目標となる先行参加者の実践は見えてしまうであろうし、もしそれらの具体的な人物が実在しなくとも、自らの実践の課題が構造化されればその克服に資する共同体への参与が継続される。すなわち、それらの参加の度合いが進行した行為者も、より十全な参加を行うための共同体の「周辺的参加者」となるわけである。この点を、レイヴとウェンガーは、「中心的参加 central participation」や「完全参加 complete participation」はないと、慎重に説明している[viii]。

また、学習は、身につけられた「実践－評価」図式と物や人などの環境によって時々刻々と変化をする。そのような意味で学習は、「状況に埋め込まれ」ているのである。注意しなければならないのは、ある物や人によって作り出される状況が一定の学習を引き起こすがゆえに「状況的学習」と言うのではなく、客観的には同じ状況であっても、それをとらえる行為者の参加の度合いによってその捉え方が異なるがゆえに、学習は「状況に埋め込まれている」のであるという点であろう。

4．スポーツの実践共同体へのまなざし

LPP 理論は、われわれスポーツ研究者に稔り大きな視点を提示する。そして、ブルデューが指摘するように、LPP 理論にのっとったスポーツ教育法の分析は、社会科学の課題である「意識の手前で産出され、実践的な沈黙の伝達、身体から身体へとも言うべき伝達によって学ばれる、そうした行動についての理論」の構築への貢献も大きいと考えられる。

それは、スポーツが多くの場合、言葉を介さな

い実践によって伝達されるばかりでなく、スポーツの共同体が、世界に散在するクラブやチームといった小さな実践の共同体を結びつける大きな構造体として構想されうるからでもある。また、その共同体は、スポーツに関与する他の実践共同体、たとえばスポーツ研究者・科学者の共同体、スポーツ指導者の共同体、スポーツジャーナリストの共同体、そしてスポーツファンの共同体などをも含み込むものである。LPP が提示する視座は、ミクロのレベルにおいては、スポーツ実践の学習過程がどのように進行するかを詳細に分析する枠組みを提示し、マクロレベルでは、スポーツに関与する実践共同体どうしがどのような付置連関で結びつけられているかをも明らかにする分析枠組みを提示するのである。

では、具体的にどのような手法をわれわれはとればよいのであろうか。

LPP 理論を用いた研究では、対象となる実践共同体に対して参与観察を行い、詳細なエスノグラフィー（民族誌）を記述することが第一の課題となる。民族誌といっても、どこか遠い異文化の中に身を置き、特定の民族集団に対する記録を行うわけではない。レイヴらの研究の中では、「ユカタンの産婆の徒弟制」、「ヴァイ族とゴラ族の仕立屋」の事例と同時に、「海軍の操舵手の徒弟制」や「肉加工職人の徒弟制」、「禁酒中のアルコール依存症者の徒弟制」の事例が紹介されている。一見、エスノグラフィーの対象としては疑問がもたれるような事例に対しても、LPP の研究はアプローチを試みるのである。このような点でブルデューが批判した、構造主義的な「研究者」と「対象」の隔絶した関係を、LPP は乗り越えているといえる。彼らが問題にするのは、特定の社会集団が共有している「構造」を明らかにすることではなく、ブルデューが指摘した「社会科学」の課題である「社会的実践はいかにして伝達・共有されるのか」という疑問の解明なのである。

このような視角に立てば、われわれは目の前に多くの研究対象が存在することに気づかされるであろう。

われわれの身の周りには、スポーツを実践する集団は数多く存在する。たとえば「運動部」。現在では「日本的な集団主義の集団」「前近代的な集団」としてネガティブな評価がされる機会の多い学校の中の運動部には、外から見て特殊とも目に映る特異な行動パターンや言葉の使い方が認められる。これまで、多くのスポーツ研究者は、これらを「前近代的な悪習」「日本的な集団のネガティブな伝統」であると批判しながら、なぜそのような悪弊が、またそのような「体質」をもった集団が再生産され続けているのかについて詳細な分析を試みようとはして来なかった。LPP 理論にのっとって考えるならば、日本の運動部において新参者＝新入部員が一人前のプレイヤーとなるためには、「目上の者の言うことは従順に聞く」「勝つためには個人の意見を主張せずに集団の意志に従う」といった態度こそ身につけねばならない実践としてとらえられるであろう。また、それらの態度を身につけさせるために巧みに実践共同体＝運動部にセットされた「先輩からのしごき」や、「根性練習」といった儀礼的イベントの意味についても、冷静に分析をするフレームが用意される。さらには、運動部員をとりまく監督、コーチ、父兄、友人などの人的環境が実践共同体の中でどのように配置されているのか、また、学校、グラウンド、試合会場、学校帰りによるコンビニエンス・ストアーなどの物的な環境の配置なども、分析対象として上ってくる。運動部という実践共同体の詳細な記述は、単に、スポーツという実践を身につけるためのものとしてそれを描くのではなく、あの「運動部」に特殊な「体質」が再生産される過程をも描き出すかも知れないのである。

また、LPP 理論は、これまでスポーツ研究の中では等閑視されてきた「スポーツ・ファン」の分析にも有効なフレームを提示するかもしれない。スポーツ・ファンがもつ応援グッズ（旗や横断幕）やチーム・カラーのＴシャツ、応援の際の顔へのチーム・ロゴのペインティング、スポーツ新聞、チームに関するホーム・ページなど、現在のファンをとりまく環境の記述は、スポーツ・ファンの

実践共同体の姿を明らかにするであろうし、また、一人前のスポーツ・ファンになるとはどのようなことか、その過程はどのようなものであるかといった一連の問題群に対する研究視角を提供するであろう。

産業化が進んだ現代の社会においては、スポーツに関わる人々を取り巻く環境は複雑な構造をなしている。また、スポーツという文化が世界中へ普及しているということを考えるならば、その実践の共同体も世界的な広がりを持ったものとして描き出されるであろう。グローバル化時代のスポーツ研究者には、一方でスポーツを実践する運動部やクラブ、ファンの行動を詳細に分析するミクロな視角と、他方で、それらがメディアで結びつけられた世界システムの中でどのように位置づけられ、再生産されているのかを分析するマクロな視角をももつことが求められている。これらを同時にもち、実践の共同体の現在の様相を描き出すことは非常に困難な作業となるであろうが、まずは、LPP 理論が用意する一セットの分析枠組みを持ってスポーツのエスノグラフィーを書くべく、スポーツ実践の場に降り立ってみようではないか。

---

i 1983年にパリで行われたICSSの第8回シンポジウムにおける開会講演。スポーツ社会学者を聞き手として行われた。
ピエール・ブルデュー，石崎晴己訳，『構造と実践』，藤原書店，1991年，287～288ページ

ii レヴィ=ストロースは構造主義の範型として考えた言語学の音韻論について「まず第一に、音韻論は意識的言語現象の研究からその無意識的な下部構造の研究へと移行する」と述べている。
レヴィ=ストロース，『構造人類学』，みすず書房，1972年，39～40ページ

iii インタビュアーの「それでは、構造主義に関してはどうですか？この潮流に対するあなたの実践的関係はどのように変化してきたのですか？」という質問に答えて。彼の批判した構造主義の考え方の中では、たとえばイヌという動物を指して「この動物はなぜイヌというのですか」という質問をしたときに答えがないように、「なぜそのように行動するのですか」という質問に対しても答えはないととらえる。それは恣意的な「無意識の構造」が規定するからである。しかし、ブルデューは引用した部分にもあるように、それをあえて質問したのである。その結果、親族関係に関する行動の分析においても、レヴィ=ストロースはそこに現地の人々が無意識にしたがっている構造しか見いださなかったのに対して、ブルデューは当事者が「戦略的」に行動していることを発見するのである。
ブルデュー，前掲書，36～37ページ

iv ジーン・レイヴ，エティエンヌ・ウェンガー，佐伯胖訳，『状況に埋め込まれた学習－正統的周辺参加－』，産業図書，1993年

v 同上書，1～2ページ

vi 同上

vii 同上書3ページ

viii 同上書10～12ページ